

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	資料紹介・高永清「回想録」--川中島移住をめぐって
Author(s)	中川. 浩一 / 坂本. 雅子
Citation	茨城大学教育学部紀要. 人文・社会科学・芸術(36): 13-22
Issue Date	1987-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/11156">http://hdl.handle.net/10109/11156</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

## 資料紹介・高永清『回想録』

——川中島移住をめぐる——

中 川 浩 一  
坂 本 雅 子

昭和六（一九三一）年五月七日、前年十月二十七日に生じた台湾原住民「高砂族」の抗日蜂起―日本側の呼称は霧社事件<sup>①</sup>への参加者とその遺家族は、台湾総督府理蕃課によって、父祖の地から能高郡（現・南投県）川中島へ、強制的に移住させられた。

台湾総督府に勤務し、「高砂族」統治に直接関与した人たちが書き残した記録によれば、抗日蜂起に参加した集落住民と台湾総督府による武力弾圧で傭兵的役割を果たした集落住民―「反抗蕃」と「味方蕃」の間で「不祥事件」<sup>②</sup>がおこり、その続発も懸念されるので、両者を隔離するのが適策として行われた措置とそれは説明されてきた。

事実、昭和六年四月二十五日の早暁、降伏した「反抗蕃」とその遺家族を収容した仮設集落が、「味方蕃」に属する「タウツア蕃」によって襲撃―日本側の呼称は第二霧社事件―され、二百十六名の死者をだしていた。<sup>③</sup>

とはいえ、右に紹介した見解は、きれいごとくにすぎない。「第二霧社事件」そのものが、台湾総督府の「理蕃」関係者による教唆扇動によって発生した事実が、今日では明らかになっている。強制移住を実施した本当の理由は、永く山地に居住し、勇武の誉高い人たちが、居住環境の全く異なる低山性の谷底部に移し、しかも水稲耕作民化することによって、斗争心を失わせようとしたところにあると考えられる。

加えて、霧社事件に際して、「味方蕃」となり、蜂起鎮圧に協力した集落住民に対し、論功行賞を行う必要からでた措置とも、説明しうるだろう。強制移住によって生じた集落跡地や耕作地は、「味方蕃」に分配されており、中でも「タウツア蕃」が、最も多くの分配を受けているとの事実指摘をなしておきたい。

### 高永清『回想録』の位置づけ

高永清（一九一六―一九八二）は、「霧社事件」に際して蜂起した六つの集落（マヘボ社、ポアルン社、スーク社、タロワン社、ホーゴ―社、ロードフ社）でも、有力「蕃社」を構成するホーゴ―社に、生を受けている。父ワリスクラ、母イワリヘビリの長男として誕生、幼名はピホワリスであった。

聡明で評判となったピホワリスは、原住民、漢民族を差別し、日本人とは別箇の教育制度を存在させた台湾総督府の統治策にもかかわらず、日本人並みの教育を施さされる結果となり、事件発生当時は、霧社尋常小学校の第六学年に在学していた。日本人並みの教育を施すおり、ピホワリスは、中山清と改名させられる。高永清は、台湾が中国に復帰してからの氏名である。

中山清の尋常小学校入学は、「高砂族」への統治を円滑に行おうと

する際の買弁化を狙ったものと考えられる。それまでも、「蕃社」の首長「頭目」や有力者の子弟を、尋常小学校に入学させ、ついで高等小学校に送り、買弁に仕立てる措置がなされていたが、ごく普通の集落民であったワリスクライワリヘビリの長男に同様の待遇を与えたのは、ピホワリスの秀れた資質に、着目した結果と思われる。

日本人百三十四人殺害（他に誤殺された漢民族二名）の惨劇が発生した霧社小学校校庭から、身ひとつで逃れたピホワリス（中山清少年）は、非蜂起「蕃社」のひとつであったタウツア社の親類にたちよった。しかし、そこで「味方蕃」から「反抗蕃」の係累と判定されて餓首されそうになる。その危機を収拾し、ピホワリスの命を救ったのは、タウツア駐在所に勤務していた小島源治巡査であった。

「蕃語」をたくみに「日本語」に通訳できたピホワリスは、こうした経緯に伴って、霧社事件の現場に居合せ、さらに残酷な弾圧が加えられる實際を自ら体験し、加えて通訳を行う中で、聞き書きさせられる結果となった。

ピホワリス少年は、「反抗蕃」の川中島移住後、彼を保護してきた小島源治巡査のもとから、同族の跡を追う形で、川中島住民の一人となった。この地でピホワリスは、再度中山清にされてしまい、台湾総督府所属警察官では最下級に位置づけられる警手に任用のうえ、引責自殺と判定したホーゴ社出身警手花岡二郎（ダックスナウイ）の未亡人花岡初子（オピンタダオ）と結婚させられるわけである。

警手中山清は、川中島での勤務に励む中で、通信教育（中学校講義録）にたよる独学を積み重ね、巡查任用、普通文官任用の試験に合格する。さらに医師免許にも挑戦のうえ難関を突破し、ついに、川中島に勤務する警察医（公医）となつて、日本帝国の敗戦を迎えた。

十数年にわたる警察勤務の中で、中山清は職掌上で入手しうる霧社

事件関係記録を閲覧し、ノート作りを行った。台湾の中国復帰後も、作業を継続し、また事件に参加した人たちからの聞きとりを加えて、「回想録」を作成したのである。

筆者の一人である中川は、霧社事件の前史に位置づく「サラマオ討伐」調査の目的で、昭和五十三年に渡台しており、はからずも高永清II高彩雲（花岡初子↓中山初子）と面識を得た。「回想録」は、翌五十四年の渡台時に借覧のうえ、全文複写の許諾をうることができたのである。

「回想録」を原文のまま公表する許可は、昭和五十六年の渡台で得ている。内容は、霧社事件に絞ったうえで、研究同人のひとりである和歌森民男の手により、印刷に付した事実を特記しよう。今回は、対象を川中島移住に合せて、原文のまま公表する。

「回想録」に対する補注の一部は、昭和六十一年八月、坂本雅子が渡台のうえ、川中島（現在は南投県仁愛鄉清流）に出むき、高彩雲、高友清（高彩雲実弟）の通訳によって、事件に最年少で参加して抗日戦争に従った曾少聰（アウイタダオ、一九一五年生まれ）から聞きとった内容にもとづいている。

#### 虚構のうえにたつアウイヘッパハ証言

昭和六十（一九八五）年十二月、初めて世に出る蜂起参加者の貴重な証言をうたい文句に、アウイヘッパハ「証言霧社事件」解説許介麟と題する書物が、草風館から刊行された。著者のアウイヘッパハは、中国式氏名を高愛徳、川中島↓清流に長く居住し、中華民國治政下に、南投県議員を四期十六年勤めたと自称している。

高愛徳の存在は、太田君枝、中川静子の二人が、雑誌「中国」第六九号（一九六九年）に、現地探訪のルポルタージュ「霧社をたずねて」

を発表したおり、重要な証言をした人物として、研究者の間では名を知られてきた。

アウイヘッパハの霧社事件体験は、抗日戦争に参加し、「討伐軍」の霧社占領後は、山中にひそんで戦斗の状況を観察したのに加えて、少年英雄とみたてられて、多くの戦斗員から証言を得た結果にもとづくものだとされている。

蜂起が組織としての抵抗力を失い、ゲリラ戦に入った後、生死の極限にたたされる中で、アウイヘッパハは投降したと、本人は主張する。

「蕃語」を「日本語」に通訳できる特技を買われて、アウイヘッパハは、投降者の訊問に参加させられ、結果的には、数多くの、しかも生の形で聞き書きを作りえる好運にめぐまれたと称している。

解説者として、六十ページをこえる解題文を付した許介鱗（台湾大学政治学系教授）は、同じ通訳でもピホワリスの得た体験は、小島巡查の下において「首狩り」された同族の首の登録を手伝ったということぐらいであるのに対し、アウイヘッパハのそれは、捕虜となつた抗日セーダツカ族の男たちと日本人巡查の通訳をしたために、おとなたちの抵抗戦争をも追体験する、一級品だと主張する。

だが、こうした記述は、いかにも陰険である。高永清を中傷することによってその『回想録』の価値をひき下げ、反対に自らの証言の正当性を高めようとする意図が、読みとれるからである。

アウイヘッパハは、日本人が集団で殺害された霧社公学校校庭において、少年組の一人として蜂起に加つたと自称する。そのため、事件発生当日の夜、スクレダン山（花岡山）<sup>(註)</sup>からパーラン社の親類への避難を試みたおり、危険分子として集落入りをこぼまれ、やむなく山中に潜伏したので、抗日戦争の場面を、数多く目撃しえたと、その体験を語っている。

ところで、スクレダン山から非蜂起「蕃社」であるパーランへの避難に際して、アウイヘッパハ（高愛徳）も同行し、投降者や遺家族たちを一括監督する収容所が完成するまで一緒にパーラン社の保護を受けていたと、オビンタダオ（高彩雲）は証言する。アウイヘッパハは、抗日し、日本人に危害を加えたために、パーラン社入りを拒否されたと称しているがとの問い合せに対し、私達は十月二十八日<sup>(註)</sup>の夕方、うすぐらい時、花岡山から花子さん（注）自殺した「高砂族」巡查花岡（一郎の妻）の姉夫（つまり義兄）について、私達七人で一緒にパーラン社の各親戚の家に、ロードフの収容所に行くまで世話になりましたのに、自分の本に書いてあるのは、人から追い出されて、又母、弟、妹達を連れて又山の中に入って人々と一緒に戦つたと書いてゐますが、それは全くの作り事です。……アウイヘッパハが戦つた事は作り話です。この事はちゃんと今でも證人が生きております。戦つて参加していた人は、始めから終りまで戦争して無事に助つて生き残つたアウイタダオに聞いたら判ります。彼は、アウイヘッパハは少しも参加してゐない、又戦場でも見た事がないと正直に話してゐます<sup>(註)</sup>との書信を高彩雲がよせてきた事実を特記しよう。<sup>(註)</sup>

#### 証言・川中島移住

B5判横野ノート一冊（全百二十四ページ）を使い、見開き2ページの右に本文、左に注を入れる形で作製された高永清『回想録』は、「霧社事件関係者の略伝」三〇二九ページ、「霧社事件の顛末（原因・経過・結果）三〇〇四八ページ、「第二霧社事件とその後の経過」四九〇一〇四ページ、「高永清自伝」一〇五〇二四ページからなりたっているが、本稿ではその六六ページから八四ページまでを紹介する。原本は、旧字体、旧仮名づかいである。脱字、誤字と思われる個処

については補正した。後半を構成する日本人警官の略伝では、個人のプライベートにかかわる部分は、あえて伏字とした。

### ◎川中島へ移住

民国二十年（昭和六年）四月二十四日早朝日警計画の下にタウツア社同胞壮丁一九一人は無武装の吾々に無情な夜襲を施して悲惨な結果を生じた。シーバオ集中所（収容所）では一四七人殺害され余生一七二人は桜駐在所に収容され、ロードフ集中所では六九人殺害され一二人命からがら霧社まで脱出して農業講習所址に収容された。

ところが運命の前途はまだまだ計り難いものが待っていた。タウツア社（が）吾々を夜襲して一刻の下に二一六人を殺死した名譽？に対して萬大社壮丁は日警に対して更に襲撃の手段に出ることを願ひ出た。其の意味は将来タウツア社との勢力と名譽上の平衡を期する為だと？若し此の事が実行されていたなら吾々の社の民族は恐らく全滅したものだと思ふ。

吾々の心境はまさに「屠場の小羊」であった。日警は萬大社の申出を許可しなかった。恐らく前年十月二十七日運動会場の仇を果したことに満足を感じたものと思ふ。

吾々余生者は静かに前途を黙想した。余生者中にまだ充分な戦闘精神が残つてゐた。投降前に幾らかの銃器弾薬を山中に蔽して万一に備へてあった。

ポボクワリスはロードフ社、ワリスパワンはシーバオ社の壮丁を卒領してタウツア社に同様な夜襲を決行する計画を密かに進行中であつた。日警は事の重大を察知したものらしい？

急遽吾々の移住を考へて川中島を其の址と撰択した。

併し之も単純でなさそうである。何故なら川中島の隣村眉原社には曾って（大正九年）日警の強制動員で吾々の祖先が襲撃した歴史のあ

るサラマオ社同胞の一族が先住してゐたために対敵心理無きにしもあらずであることが予想されるので、日警は先ず眉原住民の意見を聴取して同意を求めた。（恐らく説明したであろう）

幸ひにして同意を得て、○月○日眉原社頭目○○外○名は霧社まで来て吾々に対して親近を表し又勧誘もした。吾々は故郷を離れるに忍びないが前途の生命と後代の為に同意の外に途がなかった。日警は吾々の行動に対して嚴重な警戒と監視を行ひ意外事の発生を防止するに務めた。

孤児、鰥夫寡婦等不良環境に於ける吾々の心境は悲哀苦痛の裡に平静を強制した。焼打ち後の衣食欠乏の中を日警から形ばかりの救済を得て四月二十五日（五月五日まで過した。移住計画も順調に進行したらしい。突然五月五日夕方、明之日早朝移住することが決行すると伝達された。

吾々は夕方から朝まで心裡的警戒を強化した。何故ならば、日警は詭計を常套手段とするからである。明日移住すると宣告して不特定当晚又萬大社同胞の襲を受けるかも知れないからである。六日夜が明けた。二九八人は懐しい故郷を後にして列をなして眉溪台車駅に向つた。二九八人每人身体一本で一片の荷物もない。只ロードフ社ロシポホク一人が公母二羽の鶏を抱へてゐただけである。途中は約十メートル間隔の日警の武装警戒であつた。眉溪に着くと約六十台の台車に乗せられ脱兎の速さで坂鉄道を疾走して埔里製糖会社駅に着いた。其処で又有無を言はず発動中の火車列車に乗せられて小埔社に到着した。中食は食べたか食べてゐないか現在記憶にないが心中恐怖感で食事のことなど気にも掛けてゐない。

小埔社で火車を下りて歩行で八幡峠（大平頂）を越えて北港溪側の下り坂を通り梅仔林で北港溪々流に懸る四本麻竹橋を渡って川向へ、

其処が予定の川中島で霧社から埔里二十五公里、埔里から北の方へ又二十四公里、一日四十九公里移住行程を終わった。

移住先の川中島は数十甲歩の山林の麓に約三十甲歩の既成水田と略同面積の平原が広々としてゐた。日警は此の土地は皆吾々に与へると指示した。

水田の処々に点々と平地人農民の家屋があつた。三百人近い難民風の吾々山地人が急に入つて来たのに平地農民は口を開けて眼を大きく見開いて慌ててゐる。佃人のせいか恐らく何らの予告も受けてゐないらしい。当日退居命令を買って急ぎ荷物を担ひ水牛を引いて一戸一戸北港溪の大川を渡り、依々として後を振り返つて何処かへ出て行つた。吾々も憐れな様相で来たのだが、彼等平地人も永年苦勞して開拓した土地を命令で棄てて去り行く其の様相も又憐れなり……

註 聞く処に依ると日警は佃人（小作人）の意見を無視して地主に對して強制買収を行ひ然後佃人をして彰化地方の官有地を割当て強制移住を命令した。佃人は一応割当ての土地まで移住した。然し山地住民が海岸地帯に住むことは環境不同の關係で容易なことではなかつた。後彼等は一戸一戸割当てられた土地を放棄して流浪生活数年再び川中島の向ひ梅仔林に戻り日稼ぎ生活をしながら梅仔林荒地開田を一步一步開始した。現在梅仔林で水田耕作をしてゐる平地同胞は即ち曾つての川中島荒地開拓者である。

川中島では日警約五十人が警備に配置されてゐた。五月七日から天幕を張り其の下で共同生活が始まつた。糧食（米）は地主の倉庫に残してあつた粃を搗いて分配して炊き日警から食塩を分配して貰い塩水を飲み野生芋を副食として餓をしのいだ。

併し吾々は日警の宣告や指示に對してまだ半信半疑であつた。平地人が退居して去り五日八日に眉原社頭目が多数の民衆を伴ひ來訪し交歓会を開いたので幾らか安堵した。交歓会の序に日警は吾々と眉原との間の耕作地、獵場の境界を指示し紛糾なきやう訓示した。

其の後日警は耕牛田頭と数多の農具を下付して水田耕作を指導する傍ら家屋の新建を進行した。当年九月頃まで家屋の大部分が出来上り、それを分配して住むやうになつた。<sup>U</sup>

漸く落着いた頃、即ち十月十五日の帰順式で又も三十一人逮捕投獄されたので部落民は内心非常に疑〇した。

併し此の一年間幾多の難関を通過して来た今日運命を天に託する以外になかつた。

民国二十一年（昭和七年）初（め）に水田を每人〇・八公当たり分配して各自耕作を始め生活も共同生活から個人生活に入った。原来霧社で坡地の輪耕作をしてゐたのが急に水田作に変更した為に技術上困難は重々で糧食はおろか日用品衣服などに欠乏した。幸ひにして眉原社同胞が好誼に深く（厚く）不足の補救（給）を惜まなかつた。来麻も生長し其他の畑作物も生長したので衣食住の困難は何やら解決点に達した。

◎川中島に於ける社会相？

民国十九年（昭和五年）十月二十九日以後遭日警日軍及タウツア・トロックの奇襲隊攻撃、被殺四八八人自殺四五〇人と言う嚴重な傷亡を受けた余生者二九八人は老嫗夫老寡婦、若い嫗夫寡婦及身寄りのない孤児、自治能力のない少年及び負傷残廢者等々人口僅か二九八人で戸数が一〇〇戸、一戸として完整なものではなかつた。

随つて每一ヶ人が悲傷病と言ふか厭世病と言ふか総べての者が病態

的心理であった。

一旦相互感情衝突、或は悪夢の誘惑、警察の責罵等小々事あれば厭世自殺をする者数少なくない。殊にマラリア（瘧疾）の痛苦も加って厭世自殺の原因ともなった。特にマラリア（瘧疾）は初感染なるが為に死亡率が非常に高かった。マラリアの病性を知らない為に高熱が発作すると水牛の如く水田の中に坐り込んで冷した。辛いキニーネを飲ませられるのも苦しみの一つであった。

毎日のやうに一人一人と病死自殺が増えて移住二年後には人口二九八人から二〇〇〇〜二一〇〇人と鋭減して吾々滅亡を覚悟した程であった。マラリアが慢性化するにしたがって巨大脾腫者約五〇％殆どが脾腫を免れなかった。その為に皮膚色も灰褐色となり全人口寝床に喘ぎ身体は瘦せ衰へ眼ばかりが大きく光って誰一人として笑ふものがない。まさに之を評して人生の生地獄と言へよう。

民国二十年（昭和六年）十月十五日杜丁の大量逮捕後尚一層、部落社会の畸型性を深めた。もうこれ以上逮捕投獄されることはないだろうと思つてゐたが、これに同胞の心痛は言語に絶する感があった。

その後公共施設の拡大及環境整理等でマラリア高熱を冒し乍ら毎日の様に義務労働の出演（無出資）が続いた。当時同胞は心理傷害痛苦④疾病の痛苦⑤衣食の痛苦を無言で克服した。日警の指示命令は如何なることがあつても無条件で服従しなければ生命は此の世の露と消へ失せるのである。当時の克難は弱者なればこそよく克服し得たものと  
言へよう。

民国二十一年（昭和七年）二月抗命の嫌疑で逮捕されて埔里警察課拘留所に押送途中、大平頂で捕縄を切断して脱逃した青年（パワンシユヤン当年約21才）は永遠に其の死体も見せなかった。其の妻バカンピホ（17〜18才）は厭世自殺を遂げた。此の乱世時代に貪色な日本巡

査の凌辱を受けて気憤して自殺した者さへあった。（ワリスモーナの妻ハワツチツツク）

日警〇〇重次郎伝

神奈川県横浜市人 其独生子徳衛は横浜市鶴見市〇〇通1  
1195従来医業

当時四十五歳、巡查任命後マ・ボ・ポアルン・タウツア各駐在所に勤務し民国十九年十月二十七日は巡查部長としてトロック駐在所勤務であった。家庭に妻と一子があった。折しも当日は休暇を取り一家全部平地へ外出してゐた為に一家三命共に難を免れた幸運の人である。

彼はトロック・タウツア・セーダツカ語の堪能なること霧社分室管内の筆頭であると言つてもよい。彼は勤務した部落に於ては極めて平民的で威厳を張らず人を撰らばず交友する為に語言も通じ各社の頭目勢力者等と交誼が深かった。併し彼には一つの大きな欠点があった。それは男前の漁色であった。部落の美人と見たら姦せざれば止まずの性である。伝へられるところに依ると

①美麗夫人を持つてゐる男が出獵の為に獵銃を借りると弾薬を余計付与して中央山脈へ余計外泊するやうに便宜を計った。（当時の規定は一人一〇 獵銃六〜七発子弾外泊6〜7日） 夫が外泊中に軟硬兼施巧言方法で其の妻を姦誘すると……：

註 噂に依ると〇〇警部補はタウツアに男の外子が居ると伝へられてゐる。

②部落巡邏の機会を利用して織布中の婦人を仰倒して厭慮を言わさず姦汚する如果婦人が抗拒すると設法説服する他は一向の名言を持つてゐたとか？曰、「不要悔、如来姦事外侮因起部落的非議時、我管部

落、我会処理」等々

③或時彼の姦汚事件が分室主任の耳に入り訓戒をする為に霧社分室へ出頭を命じられた。すると彼は部落の青年を三―四人帯同し霧社に赴き先ず青年に事を前以って告げ酒や小々の礼品を与へ分室へ行けば彼に有利の証言をする等手段巧妙であった。

霧社事件（昭和五年十月二十七日）後彼は警部補に昇進して専らマヘボ・ポアルン・スーク・タロアン同胞を相手に招降工作を行ってシーパオ收容所の主管として事件善後工作を行なった。其の機会に四社の中の日人殺害嫌疑者を調べ上げ第二次事件にありては来襲のタウツア同胞を射撃して一人死者を出した。？此の射撃は吾々に対して有利（保護）であったか否かは尚判断が付かない。何故なれば吾々同胞は群をなして駐在所に向かつて避難して行く其の後をタウツアの同胞が追害して、真正面から威嚇射撃してタウツア同胞一人流弾に中って当场死亡果して吾々に被害はなかったか疑問である。

五月六日○警部補はシーパオ同胞余生者一七二人を引率して川中島へ移住した。彼は表面吾々と同甘共苦を装って同胞を操縦した。十月十五日に逮捕された人々「を」調査したのも彼であった。彼の前には如何なる頑強な同胞も方法がなかった。

或る日ポアルン社パワンノミンの二子アウイパワンを調査するに當って父子共口を堅く真実を吐露しない。そこで○は米酒を出し塩魚を供して三人共に兄弟親子の如く酒を飲み酔翁に入った時折、○は嘗って日露戦争で自分が武功をたてて勲章を天皇陛下から賜ったと言つて有頂天に喜び勲章を胸に掛けて男前を誉めた、曰、「戦争に参加して首を取り得ない者は男に非らず」等々、パワンノミンは酔が入つて其の上○○の誘惑（奸計）に入り吾子アウイパワンが日人某々を臆首したことを負けずに自慢した。○○は膝を打って合礎を打った。

大いに賞揚しながら共に酒を飲み酒散後又米一斗、塩マス一尾を与へてパワン親子の帰宅を見送った。豈計らんやパワンはすっかり奸計に入ってしまったことをまだ自覚しなかった。

それが、十月十五日のアウイパワン逮捕投獄の調査であったことは事後で悟つてももう遅かった。<sup>18</sup>

十月十五日の調査工作がすっかり完了して彼はそれ以前に新高郡警察課ナマカバン駐在所に転動した。

部落民は彼を評して好い日本人と言った。誰もが彼と別れることを惜しくしてゐた。其後二度と川中島に姿も見せなければ首信もなかった。

日警安達健治伝

山形県人

民国一七年（昭和三年）頃霧社分室の外勤巡查部長をしてゐた。山地語は普通以下でおそらく部落受持をしたことがない。事件前に警界を退職、台中州庁土木課に勤めてゐたのを事件発生に因り警界に再起用され囑託として新設のロードフ駐在所に配置され主にロードフ・ホーゴ社同胞投降者を管理してゐた。

民国二十年（昭和六年）四月二十五日早晩第二事件発生に関して彼も予知してゐたものの如く、二十四日晚收容中のオピンタダオ（彼次女義子の国校同級生）に対して憐みを感じたか、当晚駐在所に泊り囲家を止めた。オピンタダオは翌朝收容所がタウツア族から襲撃されることを知る由もなく好意を拒絶して家に帰へった。豈計らんや翌朝惨めな襲撃を受けオピンは十ヶ月妊娠の大腹をかかゝて命からがら霧社まで逃げて一命二条の遭難を免れたことを想ひ出して昨晩安達の暗示の意思を始めて瞭解することが出来た、とオピンタダオは追憶してゐ

る。

同年五月六日安達は余生者一二六人を引率して川中島移住を遂行、  
 ○○警部補と両頭馬で移住地の建設工作に従事、○○警部補の新高郡  
 ナマカバン駐在所転勤を機会に警部補昇進、東勢郡佳陽駐在所勤務を  
 命じられ川中島を離れた。彼は川中島新移住地の建設工作に功労は大  
 きかった反面、部落民の義務労働も苛酷であった。民国二十年（昭和六  
 年）十月十五日帰順式に於て大量（31人）逮捕も彼の任期中で遂行さ  
 れた。後に警界を退休し台湾軽鉄株式会社埔里汽車站々長を勤め吾々  
 が埔里へ出る度に見面の機会が多かった。第二次世界大戦結束後帰国

注

- (1) 現在、台湾では、漢民族の渡来前、全島にわたって居住していたマレー  
 シア系の原住民を、高山族あるいは山地同胞（山胞）と呼称する。これら  
 の人たちは、日本統治期においては、「生蕃」と名付けられた。典型的な  
 差別用語であり、清朝統治期の用語を継承したものである。「生蕃」を開  
 化し、日本帝国の施策に順応させる事業は、「理蕃」と呼ばれてきた。「高  
 砂族」は、台湾に対する日本流の旧称にもとづく用語である。高永清は、  
 漢民族は我々を差別し、土地を収奪のうえ、武力で山地に追いこんだ歴史  
 を持つにもかかわらず、原住民が祖先以来の生粋な山の民であるかの如き  
 呼称をするのは不当と主張していた。「高砂族」は、原住民の先住権を認  
 める理にかなった用語であるから、日本語で文を書くときには、それで統  
 一してほしいとの要請を、筆者は生前にうけたわけである。
- (2) 蜂起した人たちは、その遺家族を含めて事件ではなく事変であるとの見  
 解をとっている。単純なトラブルではなく、民族の尊厳をかけておこした

戦争とみる立場である。

- (3) 代表的な存在は、台湾総督府理蕃課長として事件発生から最終処分まで  
 現地にあっての実体験を積んだ森田俊介『台湾の霧社事件―真相と背景』  
 （一九七六年、伸共社）である。
- (4) 具体的ないきさつについては、中川浩一・和歌森民男編著『霧社事件―  
 台湾高砂族の蜂起』（一九八〇年、三省堂）の一三八―一四九ページ（陰  
 謀が招きよせた第二霧社事件）が詳しい。
- (5) 当時、シーパウ、ロードフの二収容所に集められていた人たちは、「保  
 護蕃」と呼ばれていた。
- (6) 本来が山の民であるとの意味ではない。
- (7) 最初のケースは、ホーゴー社出身のダックスノーピンで、霧社尋常小学  
 校卒業後、埔里高等小学校に学び、さらに台中師範学校に入學した。日本  
 名を、花岡一郎と称した。師範学校卒業にもかかわらず、訓導に任用せず、  
 乙種巡査として、山地に配置される結果となった。こうした事情によって  
 差別への怒りを発し、抗日蜂起のリーダーシップをとったとの見解が、台  
 湾の中国復帰後には広くなされていく。
- (8) 当日、霧社尋常小学校、霧社公学校、蕃童教育所の連合運動会が開会式  
 中で、そこへ小銃、竹槍、「蕃刀」などで武装した人たちが突入し、日本  
 人を対象とする殺戮が行われた。
- (9) タウツア社が非蜂起を取りきめ、ついで有力な「味方蕃」となったのは、  
 小島源治による操縦が功を奏した結果とされている。
- (10) この間のいきさつは、前記した『霧社事件―台湾高砂族の蜂起』に詳述  
 した。
- (11) 霧社事件の原因、経過、結果に関する部分を、和歌森民男『資料紹介・  
 高永清「回想録」―霧社事件とその研究にふれて』、『桐朋学園大学短期大  
 学部紀要』第三号（一九八四年）七五―九九ページとして紹介した。

(12) 後日、この地で乙種巡查花岡一郎が妻子を殺害のうえ割腹自殺し、かわらで花岡二郎警手が縊死しているのが発見された。日本側は、かれらの死を、「暴動」の陰謀を発見できず、多くの日本人が殺される原因を作ったことに対する謝罪であり、引責行動であると解釈した。

(13) 一九八六年九月二十一日付の書簡による。

(14) アウイヘッパハは、証言執筆に先だって、たびたびアウイタダオの家に出入りし、抗日戦争の体験や見聞を質問した由である。アウイヘッパハは、アウイタダオの抗日体験を、自分のものへとすり替えたのではないかとの疑いも生じてくる。許介麟は、「ピホは日本人客がみやげにと持参してきた霧社事件関係書物を読んで、それに自分の数少ない体験を加味して、霧社事件ノートを作る。そのためか、ピホの書いたものには日本人の作品とあまり大差が見られない」と書くけれども、この部分は、ピホをアウイヘッパハは……とするのが、適切だろう。高永清「回想録」は、和歌森論文に引用されているように、客観的に事実を書き記したもので、アウイヘッパハ証言にみられる小説風のものではない。各処に会話体の文章を配したアウイヘッパハ証言は、霧社事件に題材を求めたいくつかの小説から、内容構成の材料を集めたのではないかとも思えてくる。

(15) ポボクワリスは、川中島移住の後、三名の同志とともに、脱走を実行した。けれども彼等は、霧社にゆきつかぬ前に、待ち伏せていた警察関係者によって捕えられてしまう。捕えられた四人のうち、二人は霧社で殺され残る二人のうちの一人は、埔里に移送後、同じく殺されている。だが当時十四才であった曹少聡（光復後の中国流氏名）は命を全うし、脱走の動機をインタビュりでむいた筆者（坂本）に、次のように説明してくれた。曹、初めて（川中島に）来た時には、こちらの山はとて醜くくみえました。霧社だったら、高いからあたりが見えるけれども、ここは低いから何も見えないでしょう。本当にいやでした。だから、私達は四名

で相談して、また霧社に戻っていったのですよ。

〔許可を得ないで、霧社に行ったわけですね。要するに逃亡ですね〕

曹、第二霧社事件の仇をうつためにも行ったんですよ。ところが四人がまだ、霧社に行き着かないうちに、川中島から電話で逃亡の連絡が行っていたのです。だから、霧社方面の警察が私たちのことを一生懸命に探していました。

(16) 鏢夫（カンフ）老いて妻のない男の意

(17) 強制移住の経緯、当日の状況等は、高永清の実体験ではない。この時期彼はなお小島源治巡查の保護下におかれていた。高彩雲は、花岡二郎の遺児出産の直前であり、移住に耐えなかったため霧社にとどまり、後日に移住したと筆者（坂本）に語っている。従って、川中島移住の記事は、聞き取りの集成と判断できる。

(18) 霧社事件に際し、日本人殺害に直接かかわった者に対する追求は、さまざまな方法を用い、また充分に時間をかけて進められたという。調査結果がクロとでた者が、帰順式に名を借りた一斉逮捕を受けたのである。高彩雲、高友清の談話によると、酒の席で口がすべって、息子の日本人殺害を自慢して墓穴を掘ったとされる事件にしても、実際は蜂起発生時は畑にいており、いち早く投降したにもかかわらず、誤認にもとづく誘導尋問の犠牲になったのだという。

「普通」で有名な〇〇警部補は地獄耳の持主で、住民同志のけんかも効果的に利用した由である。けんかの中でのやりとりで、賊首の自慢をしたのを聞き伝えて、ブラックリストにのせたといわれている。しかしこの種の情報には、事実無根のホラも入っていたけれど、結果は口が災いの源になった。住民の中からの密告も効果的に利用したが、女性間での嫉妬が夫に災いをもたらす例もあったとされている。事件で夫を失い、寡婦となった女性が、夫婦とも生き残り、円満に暮す家庭をねたんで、虚構にもとづ

く密告を行った例もあったと、高友清は説明するほどである。

上げる。インタビューに快く応じて下さったお二人の厚意も忘れられない。記して謝意を表させて頂こう。

## 付記

川中島移住に伴って駐在警察官となった〇〇、安達の両名に対する高永清、高愛徳による評価は、全く異っている。アワイヘッパハ証言によると、〇〇は事件に参加した者でも、できるだけ生かそうとして庇ったが、安達囑託は反対に、一人でも多くの事件参加者をあげようと、いろいろ画策していた。……ロードフ社のオビンノーカン、マヘボ社のワリスシーナイ、ボアルン社のパワンノーミンなどを使ってスパイさせ、秘密のうちに、日本人を殺した者の名簿を作って上司に報告し、自分の手柄にした。日本人の警察の上の偉い人たちは、安達はいろいろ報告するから功労があるが、その反対に、〇〇は無能だということにしてしまった」とみるわけである。

霧社事件に参加し、日本人と戦ったが、生命を全うしえたのは、あわせて六人で、そのうちアワイタダオに対して高愛徳（アワイヘッパハ）は、最大級の賛辞を付したうえで、私の手記「霧社事件」の参謀だ」と語っているあたりは、「問うに落ちず語るに落ちた」好例かもしれない。

## 謝辞

本稿を草するに当たり、現地を刻明に案内され、清流（川中島）に居住する曾少聡氏、黄可笑女史へのインタビューを手筈されたうえ、通訳もして下さった高彩雲女史、高友清氏、楊謙和氏に厚くお礼申し

（中川…茨城大学教育学部社会科）  
（坂本…茨城大学教育学部社会科学学生）  
（一九八六年九月二七日受理）